大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第三十六卷　第六號

昭和八年六月一日發行

論叢

唯物史觀の第三史觀への接近……文學博士 高田保馬

我國の國民所得……經濟學博士 汐見三郎

爲替心理說評價……文學博士 米田庄太郎

時論

異常所得の課稅……法學博士 神戸正雄

研究

フランスにおける爲替動搖と安定策……經濟學博士 谷口吉彦

わが國に於ける百貨店出張販賣の發展……經濟學士 堀新一

說苑

アダム・スミスに於ける經濟史觀……經濟學士 白杉庄一郎

英國に於ける預金の流通速度……經濟學士 大野榮一郎

附錄

新看外國經濟雜誌主要論題

本誌第三十六卷總目錄

（禁轉載）

英國に於ける預金の流通速度

大野榮一郎

第一段　預金の流通速度の研究

一、信用經濟と預金—信用經濟と稱せられる現今の經濟社會に於いては、銀行預金は重要なる役割を爲し、取引の大部分は小切手其の他の信用證券によりて決濟される。[1] 我國に就いて見るに、昭和五年末兌換券流通高は一、四一三、八九〇千圓なるに對し、同年手形交換高は五一、三七六、二三二千圓にして、當座預金は一、三六二、三二八千圓を示してゐる。[2] 又英國及び北米合衆國に於いてはケインズの云へる如く、[3] 預金通貨は流通貨幣の總體の約十分の九を占むると云はれてゐる。而してかゝる小切手振出の基礎をなす銀行預金に就いては、其の現在高のみならず特に其の流通速度の考察が必要にして、フィッシャー、ケムメラー、バーゼス、

von S. Landshut und J. P. Mayer. II. S. 13).
6) Marx. Theorien über den Mehrwert. II. 2. Teil. S. 305.
7) W. o. N. II. P. 260. 邦譯(有斐版) III. 105頁 以下參照
1) 飯島幡司；金融經濟論.
2) 金融事項參考書.
3) J. M. Keynes; A Treatise on Money p. 31.

スナイダー等[4]により論ぜられ、又測定せられたる處である。而してかゝる研究は、各國特殊の經濟事情存するが故に、各國に就きて之れが考察を必要とするのである。

二、英國に於ける預金の流通速度の研究—英國は世界に於いて信用經濟の最も早く發達せる國である。從つて英國に於ける預金及び其の流通速度の研究は、單に英國それ自體の問題に止まらず、世界各國の信用經濟を研究するに當り注目に値するのである。此の方面の研究に於いては、夙に Lionel D. Edie 及び Donald Weaver が Velocity of Bank Deposits in England なる論文[5]を發表し、次いでケインズが A Treatise on Money に於いて之れが試みをなしてゐる。特にエディー及びウェーヴァーの論文は、英國に於ける預金の流通速度、特に其の統計的研究に於いて特異のものにして、一九三三年出版の Handwörterbuch des Bankwesens 中の Umlaufgeschwindigkeit der Bankdepositen に於いても、有力なる資料として引用せられてゐる。故

に茲には主としてエディー及びウェーヴァーの勞作を中心とし、其の他英國の金融事情に關する若干の參考資料を參照して、以て信用經濟の統計的研究に資する所あらんとするのである。

三、預金の流通速度の測定方法—預金の流通速度(velocity)[6]とは、一定期間に於ける預金の回轉度數である。[7]即ち預金殘高が一定期間の預金拂戻總額(bank debits)に對して占むる割合である。而して當座預金の流通速度を測定する場合には、一定期間の拂戻總額としては、一定期間に振出されたる小切手總額を選ばねばならぬ。故に $\frac{\text{小切手振出額（一定期間）}}{\text{平均預金殘高（一定期間）}}$ の公式を採用する事により當座預金の流通速度を知る事が出來るのである。

四、本研究の順序—以上の如く預金の流通速度を知る爲には、其の測定材料としては、分母には預金殘高を必要とし、分子には拂戻總額又は小切手振出總額を必要とするが故に、先づこれ等の基礎となる材料の限界を明かにしなければならない。即ち英國の預金の流

4) I. Fisher; Purchasing Power of Money, E. W. Kemmerer; Money and Credit Instrument in their relation to general prices, C. Snyder; Business Cycles and Business Measurements, W. R. Burgess; Velocity of Bank Deposits (Journal of the American Statistical Association 1923)

5) Lionel D. Edie and Donald Weaver; Velocity of Bank Deposits in England (The Journal of Political Economy, Vol. 38, No. 4)

通速度を測定するに當り、先づ流通速度測定の公式の分母に當る預金額を第一に考察し、第二に公式の分子に當る拂戻總額及び手形交換高につきて考察し、第三に公式の分母と分子とを統一して、公式の全體に亘りて統計的研究を遂げる事とする。

第二段　英國に於ける銀行預金

一、英國の銀行及び預金額—最近一世紀、英國の金融史上顯著なるは、株式銀行(joint-stock bank)の發生及び銀行合同運動に伴ひて生ぜる銀行支店制度の擴大である。[8] 即ち銀行合同運動は、十九世紀末及び二十世紀初期には最も盛となり、漸次少數の大銀行に集中されるに至つたのである。かくて英國の預金業務の狀態は、全銀行の預金額の八十二%以上を有し、又銀行營業所總數九千六百の中、八千を有せる五大銀行(Big Five)の業務によりて、其の大體は察知され得るに至つた。

五大銀行及び其の他の五銀行は、[9] 手形交換所組合銀行にして、一九二一年一月以來、引續き負債及び資產の定期月報を各自發表して居る。之れは英蘭銀行以外の英國の銀行預金に關する月々の材料として唯一の源である。而して右の十銀行の中、National Bank は主としてアイルランドに於いて其の業務を爲してゐるが故に、今は之れは除き、他の九銀行の月報を基礎として、各銀行の預金高及び、全銀行の預金高總計より預金の月別の系列を作製する事が出來る。併し乍ら以上の如くして作製される預金の系列には、修正が加へられねばならない。蓋し一九二一年以後、之等組合銀行以外の銀行が、組合銀行に合併されたるが爲に、その被合併銀行の預金は一九二一年以來全期間連續せざるが故である。[10] 故に其等被合併銀行の預金に連續性を與えるが爲に、合併前の全期間の各月に就きて、預金高總計を一定の割合丈增加せしめるのである。即ちその一定割合とは、合併時に於ける被合併銀行の預金高が九組合銀行の預金總計に對して占むる割合である。かくて「修正されたる預金高」を求める事が出來るのである。

6) H. Neisser; Umlaufgeschwindigkeit der Bankdepositen. (Handwörterbuch des Bankwessens, S. 567)
7) 田中金司氏；預金の流通と支拂準備金、(國民經濟雜誌 第五十三卷 第六號)
8) R. G. Hawtrey, Modern Banking. United Kingdom. (Encyclopaedia of Social Sciences) J. W. Gilbart; The History, Principles, and Practice of Banking. p. 114–126. 牧野輝智氏；金融論 二五〇頁 二九七頁.

二、英國の銀行預金の種類—右に示したる預金は所謂總預金 total deposits であつて、總預金は current account 及び deposit account 及び秘密積立金 (Hidden reserves) とより成る。current account は我國の當座預金に當り、預金者が必要に應じ隨時、小切手を振出し得る預金である。deposit account は通知預金と言ひ得べきものにして、預金者がこの預金を引出す爲には、通知後一週間又は二週間、一ヶ月、六ヶ月等の一定の期間を必要とする。而して通知預金にありては、所謂 seven-day deposit がその大部分を占あてゐる。[11]

以上の如く總預金中には、當座預金、通知預金其の他を包含せるも、何れの銀行もそれ等を各別に區別して發表せざるが故に、各預金につきて、正確なる割合を知る事を得ないのである。然るに最近ミッドランド銀行が、一九一九年以來の同銀行に於ける總預金に對する當座預金の百分比を公にせしが故に、之れにより[12]て各預金を分離する事が出來る。即ち同銀行は、五大銀行中最大にして、二千以上の支店を有しその營業は

廣い範圍に涉れる有力なる銀行なるが故に、其の百分比は九組合銀行及びイングランド全體の銀行の典型的なるものと推察する事が出來る。故に此の百分比を前記の九銀行の「修正されたる預金高」に適用して、「九銀行の一九二〇年以來の算定されたる當座預金高の系列」を得る事が出來る。

第三段　英國に於ける手形交換高

一、手形交換高—預金の流通速度を知るに重要なる要素の一つである銀行拂戻總額は、一般には發表されず從つて其の完全なる數字を得る事は不可能である。唯手形交換所の發表する手形交換高によりて、之を窺ふ事が出來るのみにして、即ちロンドン手形交換所及び各地方の手形交換所の手形交換高は、流通速度測定の爲の重要なる材料となるのである。併し乍ら之等の交換高は、手形交換所に現はれざる小切手・手形の額のみにして、振出される一切の小切手の總額を示すものでなく、又之れには小切手のみならずその他の手形

9) Barclays; Lloyds; London Joint City & Midland; London County Westminster and Parr's; National Provincial & Union Bank of England; Bank of Liverpool & Martins; Coutts & Co.; National Bank; Glyn, Millo Currie & Co.; Williams Deacon's.

10) 銀行合併、Jan., 1928 (Lancashire & Yorkshire と Martins) July, 1927 (Equitable と Martins) June, 1924 (Child & Co. と Glyn, Mills & Co.). (Guernsey

の額を含める事は云ふまでもない。

小切手を大別すると、自行宛小切手 (internal check) と他行宛小切手 (external check) とに分つ事が出來る。而して自行宛小切手は同一銀行内で處理される小切手にして、例へば銀行の顧客間の小切手である。此の際、銀行はそれ自身その自行宛小切手の爲には一の交換所の役割を爲すものなるが故に、この小切手に關する拂戻額は、その銀行自身の帳簿及び本店への報告以外には外部に現はれる事はない。次に、他行宛小切手は、其の一部分は他の銀行との直接交換によりて決濟されるが、其の大部分は本店に集められ、手形交換所を通じて交換決濟される。此の部分が所謂手形交換高として示されるのである。

右の他に組合にも加入せず且組合銀行の支店にてもなき銀行は、組合銀行に代理交換の依頼を爲すのが普通である。それ故かゝる銀行は手形交換に於いては組合銀行の支店と同一の地位にある事となる。尚其の他に、ロンドンには手形交換所と關係を有しない外國銀行が存在する。之等の銀行よりの小切手が、組合銀行により受入れられたる時には、其の小切手は直接交換によりて決濟されるのである。

二、手形交換所の組織[13]—イングランドに於ける手形交換所は、古き歴史を有するロンドン手形交換所、(London Bankers' Clearing House.) 及び各地に存在する地方手形交換所 (provincial clearing house) である。

ロンドン手形交換所に於いては、市中交換 (Town Clearing)、府内交換 (Metropolitan Clearing)、地方交換 (Country Clearing) の三部分に分れて、手形交換がなされてゐる。市中交換はロンドンの City に存する銀行を組合銀行とする手形交換にして、其の交換高は金額に於いて最も高く全體の八十五% 以上に上る。次に府内交換はロンドンに於ける City 以外に存する銀行及び支店銀行の手形交換である。而して地方交換は、地方銀行の爲に組合銀行がロンドン手形交換所に於いてなす代理交換にして、之は又 Country cheque clearing と稱せられ、その名の如く小切手又は一覽拂

Banking Co. と National Provincial) Jan., 1924 (Guernsey Commercial Banking Co. と Westminster) June, 1923 (Holt & Co. と Glyn, Mills Co.) Feb., 1923 (Cox & Co. と Lloyds) Jan., 1921 (Beckett & Co. と Westminster)

11) Thomson; Dictionary of Banking, p. 196, 224. 橋爪明男氏；英國の株式銀行四〇頁一六三頁、牧野氏；前掲書、三〇三—三〇四頁.

12) Midland Bank Limited, Monthly Review, Marck-April, 1929.

の手形のみの交換である。

ロンドン手形交換所は、一九二三年以來年報を公にしてゐるが故に、市中交換、府内交換、地方交換の三種の交換高及びその合計を月別に、又年別に知る事が出來る。

次に各地方の交換所は十一の都市[14]に存在し、其の交換方法は大體ロンドンの市中交換と同一の方法を採り、其の所在せる都市の銀行のみの交換を爲すのである。かくてロンドン以外の交換高は、此等十一の交換所の數字より知る事が出來る。

以上の各の手形交換高及び、直接にロンドン手形交換所の記錄より得たる一九二〇年乃至一九二三年の數字により「一九二〇年乃至一九二八年の各月手形交換高」を知り得るのである。

第四段　流通速度の測定及び其の統計

一、流通速度の測定—以上の如くして得たる預金及び手形交換高の各系列により、信頼し得べき流通速度

が測定され得るかに就いて、先づ考察しよう。嚴格に言へば、銀行預金は現在の手形交換高の分類と、地理的或ひは地域的に同一標準で分類されねばならない。然るに預金は前段に於いて述べたるが如く、預金總計としては知り得るが、市中、府内、地方の三者に於いて各個別的には、之を知るを得ないのである。併し乍ら、かくの如き嚴格なる要求は、唯直接に測定される絶對的な流通速度に關しては必要であるが、一定期間に於ける流通速度の相對的變化を求めんとする場合には、必ずしも之を必要としない。即ち交換高系列に完全に適應せる預金の系列が存せざる場合にても、知り得る系列と知り得ない系列とが、其の相對的時間系列に於いて同一の變化を爲す場合には、知り得る系列はその知り得ない系列の代用として用ひられる事が出來るのである。今此處で知り得る系列は、當座預金總計及び、當座預金を除ける預金總計、及び兩者合計せる總預金總計である。知り得ない系列は、地域的に分ちたる市中の預金、府内の預金、及び地方の預金である。それ

13) Thomson; ibid. p. 145. W. F. Spalding; The London Money Market, p. 136–147. Palgrave's Dictionary of Political Economy, Vol. 1, p. 305—309
14) Birmingham, Bradford, Bristol, Hull, Leeds, Leicester, Liverpool, Manchester, Newcastle-on-Tyne, Nothingham, Sheffield.

故に右の知り得る預金系列、即ち各種預金總計を各種の交換高に適用する。而して若し預金總計の系列の變化が、其の知り得ない系列の變化と同一であるならば、交換高と預金額との比率は流通速度の相對的變化を示す事となるであらう。

最後に、流通速度を測定するに直接に拂戻總額に基かないで、手形交換高を用ひてゐる事である。併し乍ら手形交換高による流通速度と、拂戻總額による流通速度とが相異する程度は、手形交換高と拂戻總額との間の相異と同一程度なる事は、明かな事である。若し系列が相對的なる時は、これ等兩者による流通速度は、手形交換高と拂戻總額との比率が constant ならば相等しい。實際に就いて見るに、イングランドに於いては戰後、この比率は constant であると推察されるのである。

二、流通速度の統計作製—流通速度の測定計算は、先づ各種の手形交換高及びそれ等より組合はされたるものと、預金額とより爲され、一九二一年一月より一九二八年までの間の季節指數が作られる。かくて次の表が得られたのである。

Indices of Seasonal Variation of Velocity

(Computed by Median-Link-Relative Method for Period January, 1921—January, 1928.)

	England				
	V_1	V_2	V_3	V_4	V_5
	London Total Plus Provincial ÷ Total Deposits	London Total ÷ Current Accounts	Town ÷ Current Accounts	Country Plus Provincal ÷ Total Deposits	Country Plus Provincal ÷ Current Accounts
Jan.	103	103	103	103	102
Feb.	102	103	103	102	102
Mar.	105	105	105	104	104
Apr.	111	112	112	107	106
May	104	104	104	102	102
June	97	97	98	96	95
July	98	98	98	99	100
Aug.	93	94	94	94	95
Sept.	89	89	89	91	93
Oct.	100	98	98	101	101
Nov.	98	98	98	99	100
Dec.	100	99	99	102	100

次に流通速度の系列の各は、右の季節指數によりて修整され、一九二一年乃至一九二七年の平均を百として計算され、左の五つの表を得るのである。即ち

(1) Gross Velocity of Bank Deposits, 1920 to 1928 (London Total plus Provincial Clearings ÷ Total Deposits)

(2) Gross Velocity of Demand Deposits 1920 to 1928 (London Total Clearings ÷ Current Accounts)

(3) Velocity of Demand Deposits at London (Town Clearings ÷ Current Accounts)

(4) Velocity of Total Deposits in England, 1920 to 1928 (Country plus Provincial Clearings ÷ Total Deposits)

(5) Velocity of Demand Deposits in England, 1920 to 1928 (Country plus Provincial Clearings ÷ Current Accounts)

の五表であるが、今一例としてこの中の最初のものを擧げる事とする。

Gross Velocity of Bank Deposits, 1920 to 1928
(London Total Plus provincial Clearings ÷ Total Deposits)
(Seasonally Adjusted; 1921–27 Average=100)

	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928
Jan.	102.1	93.1	94.5	91.1	98.3	108.5	105.1	106.7	112.1
Feb.		85.5	91.5	98.6	101.7	107.3	105.4	103.0	105.2
Mar.		87.3	92.2	101.6	103.2	105.5	103.4	103.0	106.5
Apr.		77.8	97.3	102.7	105.8	102.0	102.7	103.4	113.5
May		84.7	89.5	94.1	100.0	102.7	103.3	111.4	115.0
June		79.7	89.9	94.9	107.4	111.3	103.7	106.9	112.7
July	95.1	85.6	96.5	95.4	103.7	107.2	104.9	105.2	111.3
Aug.		85.9	93.1	92.5	103.6	107.2	107.7	106.1	111.6
Sept.		85.0	92.8	97.0	106.9	107.0	108.2	109.9	115.4
Oct.		84.0	94.4	98.2	103.4	110.0	105.0	110.3	112.2
Nov.		84.3	92.8	101.6	110.3	108.3	107.8	106.7	111.4
Dec.		92.1	90.8	97.0	111.1	114.3	108.0	110.1	110.5

第五段　結　言

以上、エディー及びウェーヴァーの研究を基礎とし其の他の參考の資料を渉獵して、英國の預金の流通速度、特に其の測定材料の蒐集及び測定方法に就いて考察したのである。之を要約すれば次の如くである。

一、流通速度の測定材料の蒐集―第一に、流通速度の測定に必要なる預金額は、其の總預金は知り得るも當座預金のみに關しては直接に之を得る事能はず、故に特定の比率により之を推算し得たのである。第二に、流通速度測定の一要素たる拂戻總額は得られざるが故に、手形交換高を以て之れに代ふ。かくて英國に於ける預金の流通速度を測定するに當りては、適當なる材料を得る事に於いて、米國に關する研究[15]の場合と比較してより困難なるを知るのである。

二、統計の結果―前段に於ける統計より見るに、一九二〇年以來手形交換高の變化は、流通速度の短期の變化にありては著しく支配的なる事が示されてゐる。次に、當座預金の流通速度は、其の週期的特徴に於いて交換高と非常に等しい事を示す。而して各種の交換高系列を檢討するに、其の時間系列の變化に於いて多くの等しい點が見出される。これは市中交換の場合はやゝ異るも、府内交換、地方交換及び各地の交換の各系列に就いては、特に妥當する所である。

府内交換、地方交換及び各地の交換の各の交換高は微細なる變動に就いても非常に一致せるも、これはイングランドの各地方に於ける取引と同樣な變動を爲す事を示すものではない。蓋しこれ等の系列は、其の地方の取引の個有なるものを指示するものに非るが故である。即ち、各地方の交換高は、その地方の中心地の事情より影響を受けるが、他の二者に於いては各地區相互間の取引が行はれる。故に府内交換高は府内の小賣商業を指示し、而して地方交換高はイングランドの一般取引を示すと言ひ得ないのである。

三、我國と英國との流通速度の比較―エディー及びウェーヴァーは、一九二七年に於ける英國の當座預金の流通速度を推測算定して、六〇を得てゐる。[16]その計算

15) W. R. Burgess, 前掲論文.
16) Big Five の一銀行より1927年中の總拂戻額及び平均預金額を得て算出し、之に當座預金の總預金に對する比率(ミッドランド銀行發表)を適用して當座預金の流通速度を推算してゐる。

方法を示せば次の如くである。即ち

$$\text{Velocity} = \frac{\text{debits}}{\text{deposits}} = \frac{£\ 10{,}135{,}000{,}000}{303{,}300{,}000} = 33.4$$

而してこれは總預金を基礎としての計算であるから、これにミッドランド銀行の比率を適用して當座預金の流通速度を得る。

$$\text{Velocity} = \frac{\text{debits}}{55.7\%\ \text{deposits}} = \frac{33.4}{55.7} = 60.0$$

又ケインズの測定[17]によるも、一九二四年乃至一九二九年の平均に於いて約六〇と云ふ數字を示してゐる。これに對し我國の流通速度は未だ正確なるものが研究されてゐない。試みに田中金司氏の測定せられし數字[18]を採用すると、一九二七年は四六・四四にして、一九二四年乃至一九二九年の平均は五〇・一一を示してゐる。勿論、エディー、ウェーバー及びケインズの研究と田中氏の研究とは資料及計算方法を全く異にしてゐるが故に、兩者を以て直に日英の預金の流通速度を比較する事は出來ないのである。併し大體の趨勢に於いてみるに、我々が常識的に考へてゐる通りに、英國の信用經

濟は我國よりもはるかに進歩し、しかも當座預金の流通速度に於いては、六〇對四六・四四及び六〇對五〇・一一なる數字を得たのである。

以上に於いて、預金の流通速度に關して研究をなし、尙英國の特殊の事情及び獨特の金融機構にも簡單乍ら觸れたのであるが、各國は各その特殊の機構を有してゐるが故に、英國の預金の流通速度の研究を總ての國に、その儘適用するを得ないのは明かな事である。併し乍ら其の研究方法には見るべきものあり、而して又教へらるゝ所少しとしないのである。

17) Keynes; A Treatise on Money Vol. II. p. 32.
18) 田中金司氏，　前揭論文.